

会議名	平成 18 年度第 2 回 食料・農業協力講演会「食品の安全性を巡る最新動向」
開催日時	平成 18 年 7 月 7 日 (金) ; 14 : 00 ~ 16 : 00
開催場所	合同庁舎 2 号館 地下 2 階共用会議室 (東京都千代田区霞ヶ関 2 - 1 - 2)
主催者	社団法人国際農林業協力・交流協会 (JAICAF)、社団法人国際食糧農業協会 (FAO 協会)、農林水産省農林水産政策研究所
参加人数 (概数)	約 200 名 (消費者団体、主婦・学生、生産者、畜産関係団体、食品関連事業者・団体、行政 (国、自治体、独)、ほか)
1. 会議の概要	<p>BSE, 鳥インフルエンザなどについて畜産の生産現場では、畜産物の食の安全性に関する情報伝達の不手際からこれまでに多大な犠牲を強いられてきているが、今後もこのような事態が発生しないという保証はない。畜産物の生産現場から加工・流通の場面において食の安全性について消費者、教育者やマスコミの意識構造については常に事前の情報収集に努めて遺漏なきよう事前の対策を講ずる必要がある。</p> <p>このような視点に立つ講演会から、今後の畜産技術の研究開発の場に対処すべき基礎的情報を抽出して以下に報告する。</p> <p>テーマ ; 「食品の安全性をめぐる最新動向」 講師 ; 西郷 正道 氏 ; (農水省に入り肥料機械関連部署、在外大使館、OECD, 技会事務局、等を歴任、現在は内閣府食品安全委員会事務局リスクコミュニケーション官)</p> <p>別添資料の中から、食品安全基本法と食品安全委員会について説明の後、次のような項目について話しされた。</p> <p>1. リスクコミュニケーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リスクコミュニケーションの取組 ・リスクコミュニケーションの現状 <p>主な手段は「意見交換会」、進め方のパターン、出席者 (これまでに 4 万数千人)、問題点 (評価者が伝えたい情報と消費者が得たい情報は異なる、専門委員会の公開は適切か)、関係者間におけるリスク評価についての温度差、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・改善の方向性① (関係者間の情報基盤の共有、情報・意見交換の双方性の確保)、 ②効率の向上 <p>2. BSE</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国内で確認された BSE 牛の出生時期 ・米国・カナダ産牛肉等のリスク評価 (BSE リスクの同等性を評価、日本向け輸出プログラムとは、一結論科学的同等性を厳密に評価するのは困難、日本向け輸出プログラムがそんじゆされたと仮定した場合、両国産肉と国産肉のリスクの差は非常に小さい、再開された場合、管理機関による検証が必要) <p>3. 農薬</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ポジティブリスト制の導入と審議手順 ・食品安全委員会の評価体制 (専門調査会委員を倍増したが極めて手薄) ・平成 18 年度の評価予定物質 (優先評価物質 5、農薬 100、動物用医薬品 49、飼料添加物 5) ・大豆イソフラビン ・特定保健用食品 (考え方、評価の現状) <p>4. 外国との関連</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どこの国も「自国産は安全」 ・評価の同等性 ・評価と管理の分離 (日本は評価されている)

	<ul style="list-style-type: none"> ・各国とも食品安全性についてBSEが根源 ・BSEで農林省が潰れた国もある。 <p>5. 質疑応答</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(Q) 輸入化粧品品のBSE安全性について；(A) (厚労省所管だが)、各国とも危険部位は除いており、一応安全と考えられる。 ・(Q) 最近またあったTG原料穀物の報道ぶりについて、指導介入できないのか；(A) 記者レク等はしている。自然淘汰に期待し、報道の質を上げる他ない。 ・(Q) 安全委員会3年間の実感・展望いかん；(A) かなりやっていると思うが専門家と同等は無理。消費者も不信の方向には向かっていない、家庭科の先生など対象を広げたい。対象に応じた資料作りもしたい。 ・(Q) リスクコミュニケーションの温度差に関連して、専門化の教育・訓練も必要ではないか；(A) 科学者は前提を置いて話すので、説明の改善を要す。消費者も受容力を向上させろ。食育の中にも安全性について入れる。 ・(Q) アレルギー物質26番目の候補は；(A) (厚労省所管) ・(Q) 機能性食品の上限、評価法について；(A) イソフラボンパブリックコメント2回。健康食品については評価の目途立たず。 ・(Q) リスクゼロはない、安全性についての国間差は；(A) BSEについて日本は行政的対応に失敗したもので他国での反応は違う、“全国検査”は効き過ぎで、カナダではBSE牛発生後に牛肉の売れ行き向上。オランダでは鳥インフルエンザでパニック。 ・(Q) 食品安全委員会が自ら行なったリスク評価の例は；(A) 消費や諸外国からの情報により企画調査委員会で検討する。BSE中間取りまとめ、微生物の評価 <ul style="list-style-type: none"> ・(Q) 優先的評価の考え方は；(A) 厚労省、農水省の依頼があれば評価するが、リソースの問題もある。
<p>4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>食品の安全性に関わる消費者教育、学校教育に関連する畜産の食育。</p>
<p>5. 会議の所感</p>	<p>主催団体とその案内先の関連と思われるが、従来この種集まりとは出席者の顔触れがかなり異なっており、質疑における雰囲気も異なっていたように感じられた。</p>
<p>報告者</p>	<p>針生 程吉</p>